

# テキストを降下して歴史の中へ

——ハーディを精読する——<sup>(1)</sup>

栗 野 修 司

私がこれから皆さんにご披露することは、先に発表されたおふたりとは異な  
って、ハーディを授業で取り上げるという実践例の少ない人間が何かできるこ  
とはないかと頭をひねった結果思いついた問題提起です。大学から英文学科が  
次々と姿を消し、「コミュニケーション」の旗印のもと、TOEIC のスコアを  
増やすための授業が大学を席卷している現状は嘆かわしい限りですが、  
TOEIC の対極に文学テキストを置いたときに、ではその精読によって何が可  
能かということを考えることがこの話の目的です。しかし、その前に精読とは  
何かということをお示しし、最後の TOEIC という「病気」（確かにこれは人  
間の脳みその発達にも訓練にもよい影響を与えません）が猖獗を極める日本の  
大学での英語教育の現状に実はわれわれ英語教員に責任がないとは言えないと  
いうことも指摘しながら、できるだけ漫談にならないように、このパネルの責  
務を果たしたいと思っています。

まず「精読」の定義をしなければなりません、幸いなことにそれが見つかり  
ましたので紹介します。まず、精読は可能だろうかという疑問の提示から――

久し振りに『兵士の報酬』を読み返しているうちに、次のような一文に  
ぶつかってしばらく考え込んでしまった。かつて大学院生の頃にこの小説  
を初めて読んだときには、この部分を一体どのように理解したのだろうか。

The race is weakening, degenerating, (64頁)

テキストのこの部分には下線も引いてないし、欄外の書き込みもない。と  
いうことは、読んでそのまま理解した気になったかもしれない。つまり何

かの辞書を引いて意味を了解し、その先に進んだのだろう。大学院生であった私にとって、この短い文から歴史の言説の中へ正確に降下してゆくということができたとは思えない。しかし、かりに何種類もの辞書を引いてその意味を了解したとしても、それは決して精読と言えるものではない。

精読とは、いくつもの辞書や辞典をあたって、作品の内部における語句の意味を確定することに尽きるものではないだろう。とりわけ過去の、しかも外国の文学作品を相手にする場合、精読とは、問題となる語句をその時代の社会的、文化的言説との関係において確定し、それと同時に、今の時代に生きている自分の言説を交差させるということも含むはずである。

(富山83-4)

ウィリアム・フォークナーの『兵士の報酬』からセンテンスをひとつ引いて、それを題材に精読とは何かという考えがここで展開されています。この精読の定義をそのまま拝借して、トマス・ハーディのテキスト、『テス』と『ジュード』が中心ですが、を例に挙げて、どのような精読、別の言い方で表現すると、「歴史の言説の中へ正確に降下してゆく」ことができるかということを提案してみます。ハーディは建築家が図面を引くように、時代考証に細かな注意を払っていることも証明したいと思います。ハーディのテキストの精読には彼の描いた様々の歴史的事象の解説が不可欠ではないかと思うのですが、そのためにも歴史的言説を正しく理解する必要があります。ではそれをどのように理解し解説するかをお話しします。中心になるのは19世紀イギリスのキリスト教と文学の関わりで、オクスフォード運動（トラクタリアン・ムーブメント）とエヴァンジェリカリズムがその中心です。

## I

### ハイ・チャーチを中心に

ジョン・サザーランドは『ジェイン・エアは幸福になれるか』の中で、シャーロット・ブロンテのアナクロニズムをいくつも指摘しています。<sup>(2)</sup>同じよう

なアナクロニズムは、(シャーロットが自分の娘時代を背景に『ジェイン・エア』を書いたのに対して、) 同時代の事件を扱っているメアリー・ブラッドンの『オーロラ・フロイド』にもいくつか見られます。<sup>(3)</sup> 同時代のふたりの女性作家と比べるとハーディのテキストにはアナクロニズムは(私の知る限り)含まれていません。それどころか、実に綿密に彼が描くプロットの時代背景が検証されているのではないかとと思われるのです。その例をいくつか『ジュード』を取り上げて示します。1833年のユニバーシティ・チャーチでのキーブルの説教が、オクスフォード運動の始まりとなったというのはヴィクトリア朝作家を愛読するわれわれの常識ですが、このキーブルの『教会暦年 (*The Christian Year*)』の収益を基金にして、1870年に彼の名を冠したカレッジがオクスフォード大学に設立されました。経済力はないが意欲に溢れ才能に恵まれた子弟に教育の機会を与えるというのがその目的の一つであったそうです(“Keble’s Past.”)。『ジュード』のテーマを考慮すれば、この作品はキーブル・カレッジが設立される1870年以前を時代背景としているということが明らかです。そのことはハーディが作品のそこかしこに挿入している歴史的な指標から推し量ることができます。

ここでキーブル・カレッジにまつわる逸話を分岐点に、横道へ話を発展させたいと思います。キーブル・カレッジの名前は先ほど言及したとおり、トゥラクタリアン・ムーブメントの中心であった人物を記念して、その名を冠してありますが、これがアメリカだったら、キーブル・カレッジ・チャペルの基金を寄贈したエクセターの実業家ウィリアム・ギブスの名前が付けられるところでした。ギブスの資産の出所は、南アメリカはペルーのグアーノ(海鳥の糞が堆積してできた肥料。イギリスはこれの取引を独占し、ヨーロッパへ移送して大きな利益を得た)取引でした。ハーディの愛読者ならば、グアーノからすぐに『微温のひと』に出てくるアブナー・パワーを思い出すことでしょう。彼もイギリスを逃げ出して、ペルーでグアーノの商売をするという設定になっています。ウィリアム・ギブスは当時よく知られた金満家であつたらしく、次のような戯れ歌が残っています—

“William Gibbs made his dibs  
Selling the turds of foreign birds.”

ウィリアム・ギブスは財をなした、  
外国の鳥の糞を売って<sup>(4)</sup>。

4つの音をうまく響かせた<sup>ディティ</sup>小曲になっています。その音を含む“dibs”という単語にはお金という意味だけでなく、権利という意味もあり、ここでは利権という皮肉な含みで用いられているかも知れません。そこまで深く考えなくても、鳥の糞を売って大金持ちになったという歌には、庶民の妬みと批判が微妙なさじ加減で混ざり合っているようです。文明的に優越している（はずの）ヨーロッパ人が、南アメリカの廃物を有り難がるという、西洋的価値観をひっくり返すことの面白さがこの戯れ歌から透けて見えます。さらに、植民地の収奪によって得た資金で設立された大学がイギリスの労働者階級の子弟の教育の場となったという皮肉には、ポストコロニアル的な視点によって発見できる植民地主義者の二重基準が存在しています。さて、キーブル・カレッジをデザインしたのは、当時一流の建築家であったウィリアム・バターフィールドです。彼の代表的な作品はロンドンのマーガレット・ストリートにあるオール・セインツ教会堂（1849）で、1814年生まれ彼の彼の経歴の早い時期の作品です。実はバターフィールドはエヴァンジェリカルでした。それなのに英国国教会のキーブル・カレッジ・チャペルの設計を任されたという点に注目したいと思います。これを理解するには当時の宗教と政治の込み入った関係に目を向けなければなりません。

19世紀の英国国教会の信徒は3つのグループに分けることができます。  
<sup>ハイ・チャーチ</sup> 高教会派と <sup>ロー・チャーチ</sup> 低教会派と <sup>ブロード・チャーチ</sup> 広教会派がそのグループです。それぞれに別名が  
<sup>トラクタリアン</sup> あって、時局小冊子派、<sup>エヴァンジェリカル</sup> 福音主義者、<sup>ラショナルリスト</sup> 理性主義者（広教会は「リベラル・アングリカニズム」とも呼ばれた）<sup>(5)</sup>とそれぞれ呼び慣らされていました。1840年代には、それとは別にオクスフォード運動とケンブリッジ運動という、一種の復古主義運動がおこなわれました。オクスフォード運動については皆さんよくご存じだと思います。しかし、ケンブリッジ運動をご存じの方はおそらく少

ないでしょう。1839年にケンブリッジ大学の数人の学生がケンブリッジ・キヤムデン協会（Cambridge Camden Society）を設立しました。後に教会建築学教会（Ecclesiological Society）と呼ばれることになるこの団体は、A.W.N. ピュージンの建築学とオクスフォード運動の神学との混合物で、その意味では獨創性を欠いていましたが、その影響力たるやその「生みの親」を凌駕していたのです。<sup>(6)</sup> “ecclesiology” という単語は小さな辞書には出ていません。英和辞典では研究社の『新英和大辞典』と『リーダーズ英和』、大修館の『ジーニアス大英和辞典』だけが見出し語に採用しています。「教会建築学」という訳が与えられ、1837年の造語とされています。そこから “Ecclesiologist”（教会建築学者）という単語が生まれ、これがそのままこの団体の機関誌になりました。1841年に刊行が始まり、特に教会堂の内装を中心に、あるべきスタイルを提案し、それがやがて全世界からの問い合わせに答えて、教会堂が新築される際に細部に至るまでアドバイスをするようになったのです。<sup>(7)</sup> 先ほどのバターフィールドはエヴァンジェリカルでありながら、ハイ・チャーチの機関誌とも言うべき『教会建築学者』に頻繁に寄稿し、1844年には教会建築学協会の会員になりました。その後は次々とハイ・チャーチの教会堂の建築や修復（Church Restoration）に関わりました。その中にはイギリスの植民地のメルボルン大聖堂やインドのムンバイの教会堂（1858）も含まれています。特にコメントする価値のあるのはムンバイの通称アフガン教会の修復です。この教会堂は1838年のアフガン戦争でイギリスが敗れたときの戦死者を記念して建てられた教会堂だったのです。この例から読み取ることができるように、教会建築学教会はイギリスの植民地主義を体現し、それと緊密に連携しながら発展しました。教会建築学教会の会員でなければハイ・チャーチの仕事を請け負うことができないという雰囲気が出来て、19世紀の中葉にはほとんどの建築家が会員になりました（ラスキンも一時期会員でした）。（ハーディのハイ・チャーチ嫌いとは植民地主義批判 [これは同時に彼の反戦思想] はこうして見事につながります。）

オクスフォード運動は典礼を儀式化している点に特徴があります。元来、典礼主義を採らなかったオクスフォード運動が典礼重視になったのはケンブリッ

ジ運動の影響だったようで、オクスフォード運動の中心人物であったピュージャーも儀式が華美になることにもともと反対だったそうです (White 21-2)。穀物法の継続が廃止かで国内が二分していた時期と廃止<sup>(8)</sup>後の「<sup>ハングリー・フォーティーズ</sup>空腹の40年代」を背景にプロットが展開するハーディの『テス』にはオクスフォード運動の典礼主義が目立ち始めたときの人々の反応が描かれています。例えば、エンジェル・クレアの妻にと密かに彼の両親が考えているマーシー・チャントという娘がオクスフォード運動の影響で祭壇を派手に飾るのにクレア牧師が困惑しているという場面――

「ほんとに、隣のチャント家の娘が最近流行の正<sup>コミュニオン・テーブル</sup>餐台を、このあたりの若い牧師さんたちの影響で飾り始めたのだよ、祭日には花や何やらでね。その正餐台を彼女が<sup>オールター</sup>祭壇と呼んだのを聞いたときにはひどく驚いたよ。」  
(166)

『テス』というテキストはエヴァンジェリカルとトラクタリアンを具体的に対比させながらプロットの展開がおこなわれているという点に特徴がありますが、この場面ではオクスフォード運動が影響力を持ち始めた時期（1840年代）の旧世代の（しかもエヴァンジェリカルの）聖職者の反応に焦点が当てられています。オクスフォード運動はカソリック的なものの復活、あるいはそれへの復帰ですから、プロテスタントの正餐台を祭壇と呼び始めたことは至極当然ですが、そういう動きは、カソリックの否定から生まれたピューリタンの流れをくむエヴァンジェリカルにはショックだったことでしょう。このようなエピソードをあちこちに配しながら『テス』のプロットは展開します。富山多佳夫の言う、「問題となる語句をその時代の社会的、文化的言説との関係において確定」という行為は、ハーディのテキストならば、キリスト教に関わる語句を19世紀の宗教を巡る言説との関係において確定することになるでしょう。

もう少し『テス』を道案内に、歴史の言説の中へ降下していきます。正餐台と祭壇の違いはプロテスタンティズムとカソリシズムとの主な違いのひとつです。祭壇の必要性はカソリック（と東方教会）の教義のひとつである化体説

(transubstantiation 聖餐のパンとぶどう酒が実体的にキリストの肉と血となるという考え方。日本聖公会は「実体変化」という訳語を使っている)と関係があります。供犠(犠牲を捧げる儀式)をおこなうための祭壇<sup>(9)</sup>とそれを執り行う聖職者が必要なのです。これについては、カソリックのサイトのひとつが分かりやすく説明しています―

『ミサ典書 (*The Missal*)』によれば、ミサによって神の怒りは和らげられ、魂は救済されるとされている。一方、正餐台はプロテスタントやエヴェンジェリカルのおこなっているように、供犠ではなく、「ただ一度イエス・キリストの体が献げられたこと」(Heb. 10. 10)を思い出す行事である。(“ThinkGospel. Com”)

このようにカソリック教会は化体説を採りますから、その公式見解で、プロテスタント教会が採用しているインパナティオ (consubstantiation 聖体聖餐同在、パン内の聖体説、「パンの中にある」の意味。聖餐式で聖別された後もパンとブドウ酒の本質がキリストの体と血の本質と共存しているという説)は「化体をまねた造語」であって、「異端の教義」とであると批判しています。化体説はカソリックの教義でしたから、英国国教会はこれを認めず、「信仰三十九箇条」でも、地方自治体の官吏に忠順と国教信奉の宣誓をさせることなどを定めた「<sup>コーポレーション・アクト</sup>自治体法」(1661年)と「<sup>テスト・アクト</sup>審査法」(1762年)でも、化体説を否認しています。<sup>(10)</sup>

トラクタリアンが持ち込んだ典礼主義を特徴づけるカソリック的な儀式に正餐式の時に牧師が東を向くこと (the eastward position) が含まれています。教会堂や大聖堂には西<sup>ウエスト・フロント</sup>正面から入ります。祭壇は教会堂や大聖堂の東の端に設けられていますから、儀式の間牧師は会衆席にお尻を向けて、東の方向を向いて正餐式をおこないます、それを「東に向いて立つこと」と表現したのです。『テス』は1840年代で完結しますが、『ジュード』は1840年代から主人公の青年期の1860年代を時代背景としてプロットが展開しています。1860年代には典礼主義は非常に目立っていたようで、1865年にオクスフォード大学教

授だったベンジャミン・ジャウエット（1817-93）が友人に手紙を書いて、その中でロンドンの教会では「一種の耽美主義的カソリック復興運動（a sort of aesthetic-Catholic revival）が進行中」と嘆いています。<sup>(11)</sup>『ジュード』には、「牧師が東に向いて立つ」というトラクタリアン＝典礼主義者の儀式がさりげなく、しかし重要な意味を持たせながら挿入されています。それは  
リトル・ファーザー・タイム  
ちびの時 爺が彼の弟妹を殺して自殺した後のこと―

「あの人たちは私たちのことを噂しているのよ、きっと。私たち世間のさらし者だもの。天使たちにもそれこそみんなの」とシューはうめくように言った。

ジュードは聞き耳を立てながら言った。「そうじゃない、僕らのことを言っているわけじゃないよ。ふたりは牧師で、東に向いて立つことの妥当性について意見が違っているのだから、議論しているのだよ。呆れたもんだ、世界中が苦しんでいるときに、東に向いて立つもあるもんか。」（356）

この引用でジュードが言及している「東に向いて立つこと」は、1890年にカントベリー大主教エドワード・ホワイト・ペンソンによって正当とされて、その判断に反典礼主義の団体教会連盟が異議を唱え、最終的に枢密院がペンソンの判断を可としたことで決着を見ます。1860年代を特徴づけるトラクタリアンに関わる出来事をハーディは忠実にこのテキストに写し取っているのです。ジュードがクライストミンスター大学にあこがれて、しかしその周縁を回るだけで終に中心にたどり着くことのできなかった1860年代は典礼主義の最盛期で、その中心にあったのがベイリオル学寮でした。詩人のジェラード・マンリー・ホプキンスがこの学寮に在籍していた時期（1864-67）に相当します。彼もベイリオルで典礼主義者になるのです（Knight and Mason 110）。ジュードはまさに典礼主義の最盛期にその牙城と目された学寮に入学希望の手紙を書いたわけです。<sup>(12)</sup>しかし、彼はシュー・ブライドヘッドが無神論者から狂信者になると反対に、オクスフォード運動に早くから傾倒しながら、やがて高教会に批判的になります。その軌跡はハーディ自身の軌跡と重なります。



そういう（ジュードとおそらくハーディの）批判的な意見が上の引用に表明されています。この<sup>エスタブリッシュメント・チャーチ</sup>国教が現実社会の問題と向き合っていないし、認識もしていないというのがその理由であったようです。ジュードの最後の言葉はその点で的を射ています。

国教会批判は『テス』でも具体的です。自治体法と審査法は1828年に廃止されました。この廃止と同時に非国教徒たちが5つの分野での差別撤回運動を開始したのですが、その中に教区教会堂の墓地への埋葬の差別撤廃運動が含まれています（Helmstadter 71）。つまり、非国教徒は国教会の教区教会堂敷地内の墓地への埋葬が禁じられていたのです。この問題が『テス』のプロットに組み込まれています。テスが「希望」と名付けた赤ん坊が死んだ後、マーロットの<sup>ヴァイカー</sup>教区牧師に赤ん坊を「キリスト教徒として埋葬すること」を要求します。着任したばかりの牧師は困惑しながら答えます—

「そうさね、ふたりだけに関わることだったらやらんでもないが。できないね—ある理由でね。」

「一度だけです。お願いします。」

「いや、本当にできんのだよ。」（101）。

必死のテスと困惑する牧師の対比がこの場面に描かれます。『テス』に限らず、ハーディの作品はキリスト教の問題を扱う場面は緊張感をはらみますが、この場面も例外ではありません。そういう緊張感が生まれるのは、ひとつには、彼のテキストがほとんど常に「言葉足らず」であるからです。フェミニズムに依拠する批評家たちは、『狂乱の群れを離れて』のヒロインの言葉<sup>(13)</sup>を根拠に、沈黙こそハーディの描く女性たちの「表現形式 (form of speech)」なのだと主張しますが（Higonette 21）、この場面のように、テスと牧師の心理的葛藤を効果的に表現するためには言葉より沈黙の方が有効であることは間違いありません。事実、上に引用した短い会話では、言葉では表現不可能な、浜辺へ押し寄せる大波のような感情と、通常の生活では経験しないような大きな感情を表現できる言葉を探しても見つけることのできないふたりが困惑しながら対峙

する様子が目に浮かびます。

言葉を使う「戦い」ではもちろん牧師が圧倒的に有利です。牧師はしゃべるのが仕事ですが、この場面では彼の心理的葛藤があまり大きいためにそれを表現する言葉が見つからないということが示されています。彼の中で「人間性と牧師としての立場が争う」と表現する語り手の言葉も、この牧師の心理的葛藤を十分表現していません。テスの訴えに困惑する新米牧師の苦しみはテスの苦悩と共感していて、言葉を使わない「戦い」ではどうやらテスが勝利するのですー「しかし、[テス] の堂々たる態度とその言葉に含まれる奇妙な優しさがひとつになって、この牧師の気高い衝動に影響を与えた」(100)。文学テキストに宗教がどのようににはめ込まれているのかという視点では、この<sup>ヴィカリー</sup>教区牧師がここでは主役です。彼の気高い衝動は「実際の懐疑に実務的な信仰を無理矢理つなぐという苦労を10年してきながら、まだ彼の内部に残されていた」(100)のだという語り手の言葉を手がかりにテキストの言説を降下してゆくことができるからです。ここではその中身は具体的ではありませんが、この誠実そうな教区牧師が英国国教会のドグマに疑問を抱きながら、ずっと牧師の仕事を勤めてきたという暗示をここに読み取ることが可能です。この場面から考えると、そのひとつが洗礼でありもうひとつが埋葬法であるようです。この埋葬法は1880年に改正されて非国教徒の埋葬が認められました。『テス』の埋葬の場面はですからこのテキストの背景が埋葬法改正以前の時代に設定されていることの証拠となっています。

『テス』というテキストは、テスを道案内に1840年代の諸問題（特にキリスト教と教会についての諸問題）を辿り、あるいは「発掘」する「道中記」だと言い換えることができます。上の段落で、マーロットの<sup>ヴィカリー</sup>教区牧師が10年間してきた「苦労」について語り手は寡黙ですが、1840年に起きた事件を踏まえて考えると具体的になりそうです。この年ダブリン大主教であったリチャード・ホエートリー<sup>(14)</sup>が60人の著名人の署名を添えて、上院に請願書を提出したのです。<sup>(15)</sup>この請願書の署名者のなかには、あのトマス・アーノルドも含まれています。その骨子は国教会の牧師は信仰三十九箇条に同意署名しても、その内容に矛盾する説教さえしなければよいことに限定してほしいというもので

した。この誓願は、三十九箇条に書かれていることすべてが正しいと認めていない牧師がいて、その内容と典礼との齟齬に悩んでいたことを明らかにしています。1840年のこの誓願を踏まえて考えると、『テス』の牧師も三十九箇条と典礼との齟齬に長い間悩んでいたのではないかと思われるのです。

この推測はエンジェル・クレアによって補強されます。審査法と自治体法の廃止直後から始まった非国教徒の差別撤回運動のなかにオックスブリッジへの非国教徒の入学禁止の撤廃が含まれています。信仰三十九箇条の承認がオックスフォードでは入学の要件として、ケンブリッジでは卒業要件として定められていました（Helmstadter 72）。ケンブリッジへ入学する意思はないと父親に宣言したエンジェルはその理由を「信仰三十九箇条の（他はさておいても）第4条に同意署名でき」（120）ないからだと言っています。この第4条はキリストの復活についてのべたもので、「キリストは、まことに死からよみがえり、肉と、骨と、完全な人間性に所属するすべてのものとを伴った、その肉体を再びお取りになった。その肉体をもってキリストは天に昇り、終わりの日にすべての人々を審くために再来される時まで、そこに座しておられる」（日本聖公会公式サイト）と定めています。エンジェルはまさにこの超自然主義スーパーナチュラリズムに異議を唱えているのです。ハーディのテキストでは彼だけではなく、テスも「超自然的なものの存在を信じていない」（311）と言っています。ふたりの対極に置かれたアレック・ダーバヴィルはダーバヴィル家の幽霊馬車のような伝説を信じる迷信家です。彼以外にも迷信や伝説を信じる農民たちを描いていて、1840年代というのが科学的な思想と迷信とが隣り合わせに、せめぎ合いながら存在した時代だったことを伺わせます。そういう時代にキリスト教が人々に及ぼした影響とそれに対する様々に異なった反応を詳細に描き出して、近代的な宗教とはいかにあるべきかを考える手がかりを与えてくれるのが『テス』です。いささか私見を付け加えると、ハーディはキリスト教に否定的であったわけではありません。この点ではハーディはエンジェルと重なります。ハーディが生み出したこの頭でっかちで、進歩的であっても精神的に脆弱なヒーローが英国国教会について語る言葉はそのままハーディの意見だったと思うからです——「わたしは国教会をひとがその父親を愛するように愛しています」（120）。

ご存じのように、ハーディの愛すべきヒロインやヒーローはほとんどが楽器を演奏するか（エンジェルはハーブ）、聖歌隊のメンバーであるか（ジュード、ゲイブリエル・オウク）、メロディーに敏感であるか（テス）、という風な人物として描かれています。ハーディの父親や祖父は教区教会の聖歌隊のメンバーでした。教会で歌われる聖歌もケンブリッジ運動とつながります。ケンブリッジ運動がオクスフォード運動に及ぼした影響のなかに聖歌の採用があります。非国教徒（特にメソディスト）の聖歌はケンブリッジ運動経由でオクスフォード運動に伝わったのです。<sup>(16)</sup>イギリスの教会で聖歌が歌われることは18世紀中葉までは希なことで、まずウェズレーが推奨してメソディスト派のチャペルで歌われるようになりました。それまでは国教会の教区教会で聖歌が歌われることは少なかったのです。実際、1829年にフォーディントンのセント・ジョージズ教会の教区牧師に着任したヘンリー・モウルは、熱烈な説教をして信徒を辟易させて不人気になっただけでなく、聖歌隊を廃止してしまいます。もちろん『緑樹の陰で』はこの実話を基にしています。ところがこの年、1829年には英国国教会も聖歌を教会で歌うことを公認して1840年代になって聖歌がイングランド中に広まったそうですが、この間にケンブリッジ運動の介在があったのです（Wolffe 62-5）。聖歌が教会でもっともよく歌われたのが1840年から80年までの間だったことは（Wolffe 62-5）、1840年生まれのハーディにとっては幸運な巡り合わせだったといえます。祖父や父親のバイオリンの伴奏で聖歌が歌われる教会で少年ハーディは聖歌の洗礼を受けたのでした。1860年に出版された『古今聖歌集（*Hymns Ancient and Modern*）』はその後版に版を重ねるベストセラーとなりました。ハーディもこれを持っており、ジョージ・スマート作曲の「ウィルトシャー（Wiltshire）」がこの中に含まれていないことを「選者の不手際」と『ハーディ伝』で批判しています（373-4）。この曲はハーディのみならず、『キャスターブリッジの町長』のヘンチャードのお気に入りの曲でもあり、「唯一歌う価値のある曲、自分が真面目な若者だった時には海の潮のように自分の血を沸き立たせた聖歌」（234）と賞賛しています。キープルの『教会暦年』とジョン・ヘンリー・ニューマンの『折々の歌（*Verses on Various Occasions*）』1868年版にハーディが残した多くの書

き込みからも、彼の聖歌に対する熱狂が伝わってきます。キーブルやニューマンなどトラクタリアンは思想的にはともかく、聖歌に関する限りハーディの生涯の友でした。『緑樹の陰で』や『狂乱の群れを離れて』にはしばしば聖歌を歌う場面が登場しますが、これはケンブリッジ運動のお陰ということになります。『狂乱の群れを離れて』ではトロイとボールドウッドの死の後で失意のどん底に落ちたバスシーバが、教会の外の墓地で聖歌隊が歌うジョン・ヘンリー・ニューマンの「たえなる道しるべの光よ (Lead Kindly Light)」に耳を傾ける場面があります（正確には「雲の柱 (The Pillar of the Cloud)」と呼ばれる）(402)。この歌の内容とバスシーバの心理が見事に重なり合って、<sup>(17)</sup>この作品の中でも最も印象的といつてよい場面ですが、ニューマンのこの聖歌が作られたのは1833年で、ちょうどオクスフォード運動が始まった年と重なり、しかもこの歌は「オクスフォード運動の行進曲 (the marching song of the Movement)」と呼ばれたそうです (Mrose-Boycott)。ハーディは1895年の記事にはお気に入りの賛美歌（聖歌）としてニューマンのこの曲を挙げています。少し横道にそれましたが、ハーディ、教会音楽、オクスフォード運動、ケンブリッジ運動というつながりを理解していただけたと思います。

## II

### 低教会を中心に

エヴァンジェリカルは本質的にプロテスタントで、18世紀にメソディストが国教会内で改革派として勃興したときにその対抗勢力として始まったという歴史を持ちます。ところがメソディズムの創始者のウェズレーの意図に反してメソディストは国教会の外に出て、一方でエヴァンジェリカルは其中で活動を続けます。皆さんのお手元にある宗教地図で、エヴァンジェリカルズに church methodists と書いておきましたが、これはエヴァンジェリカルの中途半端な姿勢を揶揄して高教会が作りだした蔑称です。同じように低教会という表現も本来は批判的な意味が込められたものでした。英国国教会が正式な信仰の基盤として認めているのは聖書以外に、三信条（ニケア、使徒、アタナシウ

ス)、三十九箇条、『一般祈禱書』です。<sup>(18)</sup>一方、非国教徒はこれらがキリスト教の典拠(聖書)からは逸脱していると考えました。エヴァンジェリカルとメソディストの違いは英国国教会の信仰基盤のひとつである三十九箇条を認めるかどうかの違いです(そういう由来があるので、メソディストは英国国教会の外に出た現在でも一般祈禱書を使っています。)

ここでも、1840年代の宗教地図を過たず描き出している『テス』から始めます。オクスフォード運動が影響を持ち始めるまでの教区牧師は暇人で趣味人。教会での説教は日曜日に一度か二度で、それ以外には自分の趣味に十分な時間を使うことができました。『テス』の冒頭でテスの父親におまえは由緒ある騎士の末裔だよ、と語りかける牧師のトリングムは自分を「古物研究家(antiquary)」と自己紹介しています(13)。この趣味人の発見がなければ、テスの悲劇もなかったわけで、実に罪作りの古物研究者ですが、国教会の牧師は暇がたっぷりあるので古物研究にいそしんでいたのでしょう。19世紀初頭の古物研究ブーム(上で述べたようにキャムデン協会のメンバーと同じです)と暇をもてあます国教会の牧師というこの時代の特徴を映しています。

聖職者の怠慢は労働者階級の宗教離れ(英国国教会離れ)を生み出しました。『テス』にチェイスバラという名前の「墮落した市場町」(65)が出てきます。ここの住人は大酒飲みで、日曜日に教会へも行かないと書かれています。その住人のひとりが「なぜ急ぐんだい。明日は幸い日曜日。教会へ行かずにずっと眠ってられるぞ」(65)と言っています。ほぼ同じ時代を背景としているらしい『帰郷』にもキリスト教と教育に背を向ける村人たちが出てきます。一方で、非国教会派の信徒たちは真面目に教会に通いました。エヴァンジェリカル・リヴァイヴァルの影響がまだ残っていた1860年代のドーセットを背景にしている『ジュード』の冒頭部分では、ジュードとアラベラの豚の屠殺の場面を日曜日に設定することによって、信心深い教会帰りの(おそらく)エヴァンジェリカルたちと国教会の信徒の違いを際立たせています。この点について、『狂乱の群れを離れて』の村人のひとりが簡潔にまとめています—

「国教会の信徒は教義なんぞ気にかけていないから、信仰と飲酒に上手に

折り合いをつける。非国教徒はやることが徹底していて、雨が降っても棺が降っても礼拝に行く。」(313-4)

「メソディズムがイギリスを（革命から）救い、エヴァンジェリカリズムが国教会を救った」と言われますが、このような状況にあった国教会を立て直すのにエヴァンジェリカリズムは大きな役割を果たしました。実際、1830年代のエヴァンジェリカリズムの最盛期に生まれ育った人たちにはエヴァンジェリカリズムの影響を受けた人が少なくないようです。クレア牧師はそういう人物として描かれています。現実世界に生きた例としては、ジョージ・エリオットやジョン・ラスキン（共に1819年生まれ）を挙げることができます。エリオットは寄宿学校在学中にエヴァンジェリカルの教師の影響を受けて、エヴァンジェリカルになりますが、やがてユニタリズムに近づきます。ユニタリアンは合理性を旨とする先進的な宗派で、彼らにとって「キリストは偉大な教師にして哲学者であるが、神の子ではない」という合理的で科学的な信条を持っていました。広教会に集う進歩的な知識人から批判されたユニタリズムはエリオットに大きな影響を与えますが、彼女は結局キリスト教を放棄するのです。彼女の信仰の軌跡をたどると、エヴァンジェリカリズムとユニタリアニズムには大きな隔たりがあったことが明らかになります。それは奇跡についての見解です。エヴァンジェリカリズムと近縁の「メソディスト派のチャペルでの礼拝や、野外集会や、野外伝統集会では、予言や夢やトランス状態や幻覚が頻繁に起こった、この多くはブロンテの生まれる頃にはなくなっていたけれども」(Griesinger 83)。同じグリーシンガーによれば、メソディスト派の創始者のウェズレーも超自然的な現象をしばしば経験したそうで、教会制度の革新も彼の霊的経験に基づいています。シャーロット・ブロンテの叔母のマリア・ブランウェルは『メソディスト・マガジン』（1804-1821）を講読していました。その経験を基にしたらしい記述が『シャーリー』（1849）に見られます。その記述もメソディズムの特徴的な性格をよく示しています―「奇跡や幽霊が盛りだくさん、超自然的な予兆だとか、不吉な夢だとか、狂信的な話もいっぱい」（389）。その純粋さゆえに、国教会再建の機動力となったエヴァンジェリカリ



ズムは一方で合理性を欠いていたことや反知性主義によって、一部のひとに反感をもたらしました。エヴァンジェリカリズムに対する嫌悪を公言していたジェイン・オースティンはその一人です (Jay, *Religion of the Heart* 9)。

ここでちょっと注意していただきたいことがあります。超自然的な、あるいは霊的なものを感知する能力には、個人差はあっても男女差がないということです。そのため、エヴァンジェリカリズムであれメソディズムであれ、霊的能力を重視する宗派は、カソリックやハイ・チャーチのような男性中心主義に陥ることがなかったのです。もう一つ注意すべきことは、霊的な能力だけが評価されたわけではありません。テイヴズによれば、霊的能力を持つだけでは救済のための確実な証拠とはならず、「精霊を目撃したという経験は、精霊の成果(実践)によって検証される必要があった」そうです。そのような背景が、男女の説教師を生むことにつながりました。また、エヴァンジェリカリズムやメソディズムの実践的な信心 (practical piety) は社会改良運動の勃興の原因になりました。そのもっとも顕著な例が奴隷廃止運動です。<sup>(19)</sup>

1800年代の中盤のイギリスは労働運動の時代でもありました。工場労働者の増加に伴って、その社会的地位の向上やモラルの向上を目指す運動が広くおこなわれ始めたのです。その中に禁酒運動もありました。メルチェスターのシェューを訪ねたジュードは「酒を出さないホテル」に泊まるという設定になっています (135)。1820年代に始まった禁酒運動は、19世紀中盤には全国的な運動になり、1872年の免許法制定につながりました。禁酒運動は、労働者階級の社会運動の一部に含まれるもので、道徳的な向上はそのまま社会的な向上に結びつくという信念の表明でしたから、禁酒運動の指導者が他の労働運動—チャーティスト運動や労働組合運動—の指導者を兼ねることが多かったのです。禁酒運動の歩みはそのまま労働組合運動の歩みとも重なっていたのです。労働組合運動の最盛期は1860年代で、1868年にマンチェスターで「労働組合協議会」の初の会合が開かれたのはそういう事情の反映です (Thompson 313-4, 319-20)。

『ジュード』の同じ章に大聖堂の西正面が修復中という記述 (135) が見られますが、これは1865年からソールズベリー大聖堂の西正面がギルバード・



スコット卿によって修復されたという事実（Cobb 114）をふまえたものです。その少し後には、シューが自分の写真をジュードに贈る場面が描かれます。“Photography”は1839年の造語で、1851年の大博覧会を契機に50年代にはブームを巻き起こし、アルバート公も写真の愛好者だったそうです。写真の人気を背景に1853年には「写真協会」が設立されました（Gilmour 219-20）。このように、『ジュード』には、1860年代の歴史的指標が点景として巧みに配置されていて、そういう指標的な語句を「その時代の社会的、文化的言説との関係において確定」できるのです。ハーディは『窮余の策』で、オールドクリップ夫人が肌身離さず身につけているロケットにシセリアの父親の写真が入っていることをシセリアが知って、それまで夫人と父親の間に何かがあったという推測が確信に変わったことを描く場面で、「それまでは彼女が想像するときだけしか見えなかった過去の愛憎の隠された水脈が地表に露出してははっきりとこの時に見えた」（99）と書いていますが、まさに、文学テキストに隠された水脈を探し出すためにこそこのようなやり方の精読が必要なのです。

今日の話の中心はハーディのキリスト教でした。改めて言うまでもありませんが、19世紀のイギリス文学に足を踏み入れようという人にとって、キリスト教についての知識は必須です。そのことをレイモンド・チャップマンは次のように言い表しています―「キリスト教について全く無知なままで、ヴィクトリア朝文学を読む人は最初からハンディを負っているのと同じで、ついには二進も三進も行かなくなるだろう」（257）。最後にハーディのテキストからひとつだけ例を引いて、テキスト精読にキリスト教についての知識は必須であることを示したいと思います。

『ジュード』に挿入されているジュードとアラベラとの特に意味のなさそうな、しかしごちない会話―

「どうしてオーストラリアから帰ってきたんだ？」

「ああ、あたしにも色々わけがあって……。それじゃあんたはまだ学監になってないの？」

「ああ」

「牧師にさえ？」

「うん」

「非国教徒の牧師さんにさえも？」（188 藤田繁訳）

この箇所でも当時のキリスト教会の状況を知らないといふと、ユードとアラベラの会話を100%理解できません。藤田訳で「非国教徒の牧師さん」に相当する原文は“a rather reverend dissenting gentleman”ですが、先に触れたように、国教会の牧師はオックスブリッジを卒業して聖職叙任を受けないとなれない特権階級<sup>(20)</sup>であったのですが、非国教徒の牧師は特別な資格を必要としませんでした。アラベラはそのことを知っていたので、ユードが国教会の牧師にはなっていないけれども非国教会派の牧師にならなれたと思い込んだのです。非国教会派の牧師というのは通常 lay preacher と呼ばれて、『帰郷』のクリムや『テス』のアレックがそうでした。エヴァンジェリカルの牧師 (a Calvinist) であったエンジェルの父親によって回心したアレックが lay preacher であるメソディストの牧師になったのもエヴァンジェリカルとメソディストの近縁性を示しています。ただし、彼をメソディストと呼んでいるのは登場人物のひとりです。他の場面では、かれは“a ranter”と呼ばれています。『新英和大辞典』はこの単語に「喧騒（けんそう）派の信者《英国共和制時代に起こった無立法主義者の一派で、すべての教派・牧師・儀式を狂信的に排斥した》」という定義を与えています。ハーディのテキストのなかで様々な異なった声を聞くことができますが、これはその一例かも知れません。

アレックはメソディストかそれとも ranter なのかを特定するのが難しいのは、ハーディの描く宗教地図が実際に即していることを示しています。つまり、英国国教会と非国教会のわずかな宗派を除けば、自分はこれこれの教会の信徒であると言わない、あるいは区別しようのないひとがいたのです。こういうひとたちを「組合教会派 (Independent)」と呼んだそうです。実際、先ほどのヘンリー・モウルは彼の伝記では「エヴァンジェリカルの牧師」と書かれていますが、ハーディが1880年に彼の追悼のための故人略伝を書いて、その中で、「新しい教区牧師は最近『メソディスト』と呼ばれている人だと分かった」と

書いています。(ヘンリー・モウルが着任したのはハーディが生まれる大分前ですから、これはハーディ自身の判断ではなく、彼の父親世代の教区民の考えであったかもしれません。) エヴァンジェリカルかメソディストかの区別、あるいは人々の概念はあいまいでした。実際、『テス』にはエンジェルから「君はエヴァンジェリカルなの」と問われて、「分かりませんわ」と困惑しながらテスが答える場面が挿入されています(174)。その後に語り手が、「自分の信条が高教会なのか、低教会なのか、はたまた広教会なのかは彼女自身にも分らなかった」(174)と語って、テスの困惑の理由を明らかにしているのです。つまり、誰かの信仰をリトマス試験紙で明確に区別することは不可能だったのです。実際に非国教徒の間では他の宗派のチャペルへ行くことは例外的でもなかったようです。ヘンリー・モウルによれば、ドーチェスター近郊のフォーディントンには彼が在任中にその2,200人からなる教区中に20人ほどの非国教会の信徒がいたのにチャペルはなかったそうです(“Life of Reverend Henry Moule M.A.”)。つまりこのひとたちはチャーチへもチャペルへも通うことのない組合教会派だったのではないかと推測できるのです。ハーディのテキストはこういう点でも1840年代のイギリスの宗教地図を写し取っていると言ってよいのではないのでしょうか。出版物がその時代の風潮を反映しているとすれば、『テス』や『ジュード』の時代背景となっている1840年代から60年代は最も宗教的な時代でした。というのは、1836年から65年の間に出版されたすべての本の33.5%が宗教関係だったそうですから(Jay, *Religion of the Heart* 7)。彼のテキストはこのような歴史的(あるいはキリスト教的)断片が構成するモザイクです。モザイクの断片を裏付ける事実をひとつひとつ確認しながら読む、あるいは歴史の言説の中へ降下することによって、そのモザイク画全体が新しい装いで読者の前に立ち現れるでしょう。それこそがトマス・ハーディのテキストを精読する醍醐味であると思います。

\* \* \* \* \*

これまでお話ししたのは文学テキストの理解には精読が必要であること、そして精読とはどのようなものかということでした。精読によって、つまり歴史

の文脈へと降下していくことによって、われわれが普段何気なく読み飛ばしている一語や一文が活性化し、テキスト内の他の単語や文と結びついて、ひとつの文脈としてつながり、そして結晶化して大きな意味体系を作り出すのです。これを、テキストに開いている小さな針の穴を探し出し、そこからその向こうに広がる大きな風景を眺める、と言い換えてもよいかもしれません。しかし、誰でも精読ができるとは限りません。富山多佳夫は、文学テキストの精読が理解できて、かつ評価できるためには「歴史的経験」が必要なのではないかと言っています。『おサル系の譜学』の先に引用した箇所が続く部分を実は省略したのですが、その部分を次のようになっています―

そう考えてみると、まだ若いうちにテキストを精読するなどということは望み得ないはずなのだ。精読は何よりも歴史的経験の問題であり、したがって老人の職分ということになる。(84)

これはつまり、若い学生には精読は無理だから、文学テキストなど読ませるなというふうに受け取ることも可能ですが、わたしは「歴史的経験」が豊かであるはずの教員が学生の精読の手助けをするなら、文学テキストの精読も可能であるというふうに解釈したいと思います。

精読という読みの問題だけをこれまで話してきましたが、われわれ英語教員の仕事はそれで完結するわけではありません。それでは、日本の大学で日本語を使って日本人学生に英文学（英語で書かれたテキストの読み方だけ）を教える英文学研究者（英語で「文を構成し、作り上げる能力と、それを口に出して発音し、相手に伝える能力」〔安井稔〕が必ずしも優れているとは言えない人たち）の再生産の繰り返しで終わるだけではないかという指摘を紹介します―

TOEIC が日本人の人気があるということの裏に、もう一つ、大きな隠れた理由があるように思われる。それは TOEIC 自体の責任ではない。責任ということであるなら、日本の英語教育界全体の責任ということになる

であろう。それを一言でいうなら、日本人英語学習者が、おしなべて、「英語で話すこと」(speaking)と「英語で書くこと」(writing)の2つは、どうにも苦手であるという事実と関係している。(安井)

TOEIC という国内限定の検定試験が日本の大学でもてはやされているのは、(就職活動を強制されている)学生側だけではなく、(英語で発信する能力を欠く)教員の側にも原因があるという安井稔の指摘は妥当です。

もうひとつ。これは先年物故したイーヴ・コゾフスキー・セジウィックの死亡記事から――

アーモスト・カレッジとデューク大学との目立った違いは大学院生の存在だった。デュークの学部生もアーモストの学部生同様優秀だったが、学部生というのはどこの大学でも英語の授業を数コマ受講するだけで、卒業して他の分野へ進んでしまった。それとは逆に、デュークの大学院生は大学院へ来る前に文学をある程度勉強していて、しかもその大部分は生涯文学に関わろうという意思を持っていた。セジウィックは学部の授業は年に一コマ教えるだけだったが、大学院では毎学期ゼミを一コマ担当した。彼女はゼミでさまざまなテーマを扱ったが、そのどれもが彼女の当時の関心の有り様を反映していた。彼女の担当したゼミは、「クイア理論」、「クリティカル・ライティング」、「ヴィクトリア朝文学の特質」の他に、一年続く「ブルーストの『失われた時を求めて』を読む」の研究指導が含まれていた。  
(“Eve Kosofsky Sedgwick biography”)

この引用の下線部をご覧ください。セジウィックの教えた大学院の科目にライティングが含まれています。日本の大学/大学院の英文学の教員と英語圏の大学の英文学の教員との違いは、その指導にライティングが含まれているかどうかという点でしょうか。言い換えれば、日本の大学ではテキストの読み方は教授するが、論文の書き方は教えないということです。これは日本の大学でTOEIC が好まれる理由と同根ではないかと思います。テキストをどのように

受容するか（入り口）を教えながら、どのように発信するかという方法（出口）を教えないのは片手落ちです。これでは学生は文学テキストという迷宮へ入ったままで、そこから出ることができません。大学や大学院の授業は発信方法を教えて完結するという認識こそ、英語教員の持つべきことではないかということを問題提起あるいは結論として最後に強調したいと思います、それによって精読も完結するのでから。

## 注

- (1) 本稿は2014年11月1日に西南学院大学で開催された日本ハーディ協会第57回大会のシンポジウム「ハーディをいかに教えるか」で発表した原稿に加筆と修正を施したものである。
- (2) サザーランドは『ジェイン・エア』の時代背景として「一番適切な」のは1830年代の前半か中盤としながらも（74）、テキスト中に含まれているそれ以前の出来事をいくつも指摘している。
- (3) Edwards 473の注番号（参照ページ番号）374など。
- (4) “William Gibbs of Tyntesfield—Guano King” による。
- (5) 広教会派は統一され、組織された集団ではなく、リベラルで、教育があり、神学的には進歩的な人々の集まりで、国教会は多様でドグマから逸脱した考えにも寛容で新しい思想も受け入れるべきだという考えを共有していて、内部から国教会を教化しようとした。すべてのキリスト教徒を受け入れるという「広い」考えを持ちながらも、カソリックとユニタリアンをそこに含めていない。カソリックは英国君主を正当なキリスト教会の首長と認めていないし、ユニタリアンはキリストの神性を否定しているからというのがその理由（Melnyk 30）。
- (6) Brandwood 51-2参照。1841年12月の「教会建築学者（The Ecclesiologist）」の創刊号には巻頭に「宣言」と題してケンブリッジ・キャムデン協会の機関誌としての目的が述べられている。それによるとこのとき既に会員数は500名を超えていた（1）。協会設立後3年足らずでこれだけの賛同者を集めたことにこの運動の勢いを感じることができる。
- (7) 1842年に発行された「教会建築学者」第11-12合併号には「チャーチとチャペルの拡張、建設、修復を促進するための提案と助言」として、建設の場所から始めて、様式、壁、屋根など詳細な「提案と助言」をしている。例えば、様式は「イギリス式のゴシック様式」に限る、壁は頑丈な石が望ましいが、適当な石のない地域では煉瓦でもよい、と具体的である（1842年7月号、152-3）。
- (8) 穀物法（the Corn Laws）はナポレオン戦争終結後の1815年に制定されて、1846年に廃止された。1832年の選挙法（その法案は the Great Reform Bill と呼

- ばれた) 改正の結果、工業地帯に住む工場労働者が選挙権を得て、安いパンを求め始めたことが廃止に向けてホイッグ党政府がアクセルを踏むことにつながった。1841年にアイルランド生まれのダニエル・オコーネルによって反穀物法同盟 (Anti-Corn Law League) がマンチェスターで設立された。オコーネルはアイルランドのカソリックであったためイングランドの大学への入学資格を持たなかった。それでフランスで学ばざるを得なかったが、それが逆に幸いして、当時最新の人権思想の洗礼を受けることになった。オコーネルは1829年のカソリック解放令の制定にも大きな役割をはたした。 (“The Campaign for the Repeal of the Corn Laws”)
- (9) 旧約聖書は祭壇を生け贄を備える場所としている。「創世記」から、エイブラハムが息子イサクを生け贄に供える場面―「神が命じられた場所に着くと、アブラハムはそこに祭壇を築き、薪を並べ、息子イサクを縛って祭壇の薪の上に載せた」(22章第9節)。
- (10) 信仰第28条「主の晩餐 (Of the Lord's Supper)」では、「主の晩餐における実体変化 (即ち、パンとブドウ酒の実体の変化) は、聖書によって証明されることが出来ない。それは聖書の明瞭な言葉に反し、聖奠 (秘跡) の本性を放棄し、多くの迷信に機会を与えた」(日本聖公会公式サイト) と明確に化体説を否定している。
- (11) Knight and Mason 107
- (12) 『ジュード』では Balliol College は Bibliol College となっている。この名前は bibliolatory (=superstitious worship of particular texts) をもじったもので、語り手のジュード批判のひとつ。このときにはジュードは「ピュージーの教父双書を熟読していた」(148) から、オクスフォード運動や典礼主義に傾倒していた。
- (13) 「分からないわ、と言うより話しようがないの。女にとって感情をちゃんと言葉にするのは難しいのよ。だって言葉というのは男の人が自分たちの感情を表現するために作ったものだから。」(364)
- (14) Richard Whately (1787-1863) は論理学者にして神学者でもあった。1831年から63年までダブリンのクライスト教会大主教。ダブリンには他にセント・パトリック大聖堂もある。ジョナサン・スウィフトはこの<sup>デューレン</sup>主席司祭を勤めた。
- (15) ホエートリーの誓願については Chadwick 181-2によった。
- (16) 「教会建築学者」1845年1月号の巻頭論文は「オルガンと教会音楽」と題して、オルガンの大きさや設置場所などを定めている (4-9)。
- (17) ニューマンの書いたこの詩の内容は、この場面のバスシーバの心理と見事に対応している。歌詞の日本語訳を示す。「1) たえなる道しるべの 光よ、/家路もさだかならぬ やみ夜に、/さびしくさすらう身を/導きゆかせたまえ。2) 行く



末遠く見るを 願わじ、/主よ、わが弱き足を 守りて、ひとあし、またひとあし、道をば示したまえ。3) あだなる世の栄えを 喜び、/ 誇りておのが道を 歩みつ、/むなく過ぎにし日を/わが主よ、忘れたまえ。4) 標 (しるべ) となりたまいし 光よ、/今よりなおも野路に 山路に、/闇夜のあけゆくまで、/導きゆかせたまえ。」(日本キリスト教団による)

- (18) 日本聖公会の解説によれば、「教義として、1930年のランベス会議(全世界聖公会主教会議)において提唱されたランベス四綱領を遵奉してい」るそうである。現在の綱領は3信条のうちアタナシウス信条(聖公会では「信条」を「信経」と表記している)が除かれて、2綱領になっている。
- (19) 非国教徒の中で最も進歩的だったのがユニタリアンで、それに比べるとエヴァンジェリカルは保守的で、その大部分は「メアリー・ウォルストンクラフトや『女性の権利』という言葉を支持していなかった」(Johnson 225)。著名なユニタリアンに、アイザック・ニュートン、チャールズ・ダーウィン、フローレンス・ナイティンゲール、メアリー・ギヤスケルがいる。
- (20) 『一般祈禱書』には一般の信徒から司教に至るまで、入信や叙任の方法についての解説がある(512-55)。

#### Works Cited

- Bebbington, David W. *Evangelicalism in Modern Britain: A History from the 1730's to the 1980's*. 1989. Grand Rapids, MI: Baker, 1992. Print.
- Bishop Hamilton's Memorial: Restoration of the Choir of Salisbury Cathedral. Proceedings of the Committee, with the Report by Geo. Gilbert Scott, R.A. and List of Subscribers*. Salisbury: Cathedral Church, 1870. Web. Jan. 20, 2015.
- The Book of Common Prayer*. New York: Oxford UP, 1990. Print.
- Braddon, Mary Elizabeth. *Aurora Floyd*. 1862-3. The World's Classics. Ed. and introd. P.D. Edwards. Oxford: Oxford UP, 1996. Print.
- Brandwood, Geoffrey K. " 'Fond of Church Architecture': The Establishment of the Society and a Short History of its Membership." *"A Church as it Should be": The Cambridge Camden Society and its Influence*. Ed. Christopher Webster and John Elliott. Donington, Lincolnshire: Shaun Tyas, 2000. 45-61. Print.
- Brontë, Charlotte. *Jane Eyre*. 1847. Oxford World's Classics. Ed. Margaret Smith. Oxford: Oxford UP, 1975. Print.
- , *Shirley*. 1849. Oxford World's Classics. Ed. Herbert Rosengarten and Margaret Smith. Oxford: Oxford UP, 1981. Print.



- “The Burial Act 1857.” *Legislation.gov.uk*. Web. Jan. 20, 2015.
- “The Campaign for the Repeal of the Corn Laws.” *The Victorian Web*. Web. Jan. 30, 2015.
- Chadwick, Owen. *The Victorian Church, Part One*. 1970. London: SCM, 1987. Print.
- Chapman, Raymond. *The Victorian Debate: English Literature and Society, 1832–1901*. New York: Basic Books, 1968. Print.
- Cobb, Gerald. *English Cathedrals: The Forgotten Centuries*. London: Thames and Hudson, 1980. Print.
- “‘Communion Tables’ or ‘Altars’—What’s the Difference” *Think Gospel.Com*. Web. Dec. 24, 2014.
- Cunningham, Valentine. *Everywhere Spoken Against: Dissent in the Victorian Novel*. Oxford: Clarendon P, 1975. Print.
- Dawson, Christopher. *The Spirit of the Oxford Movement*. London: Sheed & Ward. 1934. New York: AMS, 1976. Print.
- “The Ecclesiologist.” 1 (Nov. 1841), 10–11 (July 1842), New Series 1 (Jan. 1845). Print.
- “Eve Kosofsky Sedgwick Biography.” *PMLA*. 125.2 (2010). Web. Aug. 25, 2014..
- Gill, Frederick C. *The Romantic Movement and Methodism*. New York: Haskell House, 1966. Print.
- Gilmour, Robin. *The Victorian Period: The Intellectual and Cultural Context of English Literature, 1830–1890*. London: Longman, 1993. Print.
- “The Great Peruvian Guano Bonanza: Rise, Fall, and Legacy.” *The Council on Hemispheric Affairs (COHA)*. Web. Oct. 25, 2014.
- Griesinger, Emily, “Charlotte Brontë’s Religion: Faith, Feminism, and *Jane Eyre*.” *Christianity and Literature*. 58: 1(Autumn 2008): 78–102. Print.
- Hardy, Florence Emily. *The Life of Thomas Hardy, 1840–1928*. 1962. London: Macmillan, 1975. Print.
- Hardy, Thomas. *Desperate Remedies*. 1871. New Wessex Edition (hard). Ed. and introd. C. J. P. Beatty. London: Macmillan, 1975. Print.
- . *Far from the Madding Crowd*. 1874. The World’s Classics. Ed. Suzanne B. Falck-Yi and introd. Simon Gatrell. Oxford: Oxford UP, 1993. Print.
- . *Jude the Obscure*. 1985. The World’s Classics. Ed. Patricia Ingham. Oxford. Oxford UP, 1985. Print.
- . 『日陰者ジュード』 藤田繁訳 大阪教育図書、2011. Print.

- . *A Laodicean*. 1881. The World's Classics. Ed. and introd. Jane Gatewood. Oxford: Oxford UP, 1991. Print.
- . *The Mayor of Casterbridge*. 1886. The World's Classics. Ed. and introd. Dale Kramer. Oxford: Oxford UP, 1985. Print.
- . *Tess of the d'Urbervilles*. 1891. The World's Classics. Ed. and introd. Simon Gatrell. Oxford: Oxford UP, 1983. Print.
- Helmstadter, R.J. "The Nonconformist Conscience." *Religion in Victorian Britain: IV Interpretations*. Ed. Gerald Parsons. Manchester: Manchester UP, 1988. 61–95. Print.
- Higonette, Margaret R. "A Woman's Story: Tess and the Problem of Voice." *The Sense of Sex: Feminist Perspectives on Hardy*. Ed. Margaret R. Higonnet. Urbana: U of Illinois P, 1993. 14–31. Print.
- "Impanation." *New Advent, Catholic Encyclopedia*. Web. Dec. 24, 2014.
- Jay, Elisabeth. "Introductory Essay." *The Evangelical and Oxford Movements*. Cambridge: Cambridge UP, 1983. 1–19. Print.
- . *The Religion of the Heart: Anglican Evangelicalism and the Nineteenth Century Novel*. Oxford: Clarendon P, 1979. Print.
- Johnson, Dale A. "Gender and the Construction of Models of Christian Activity: A Case Study." *Church History* 73. 2 (June 2004): 247–71. Web. Feb. 5, 2015.
- "Keble's Past." *Keble College*. Web. Oct. 25, 2014.
- Ker, Ian. *Newman and Conversion*. Edinburgh: T & T Clark, 1997. Print.
- The King James Bible. 1611. Ed. Robert Carroll and Stephen Prickett. Oxford: Oxford UP, 1997. Print.
- Knight, Mark and Emma Mason. *Nineteenth-Century Religion and Literature: An Introduction*. Oxford: Oxford UP, 2006. Print.
- "Life of Reverend Henry Moule M.A. (1801 — 1880)." Web. Oct. 30, 2014.
- Melnyk, Julie. *Victorian Religion: Faith and Life in Britain*. Westport, Conn.: Praeger, 2008. Print.
- Mill, John Stuart. *On Liberty. "On Liberty" and Other Essays*. Ed. John Gray. Oxford: Oxford UP, 1991. 1–128. Print.
- Morse-Boycott, Desmond. "Lead, Kindly Light: Studies of Saints and Heroes of the Oxford Movement." *Project Canterbury*. Web. Oct. 30, 2014.
- 日本聖公会管区事務所 Web. Dec. 30, 2014.
- Perkin, J. Russell. "Charlotte Brontë's *Shirley* as a Novel of Religious Controversy." *Studies in the Novel* 40.4(2008): 389–406. Print.

- Shiman, Lilian Lewis. *Women and Leadership in Nineteenth-Century England*. NY: St. Martin's, 1992. Print.
- Sutherland, John. "Can Jane Eyre be Happy?" *Can Jane Eyre be Happy? More Puzzles in Classic Fiction*. Oxford: Oxford UP, 1997. 68-80. Print.
- Taves, Ann. *Fits, Trances, and Visions: Experiencing Religion and Explaining Experiences from Wesley to James*. Princeton: Princeton UP, 1999. Print.
- "ThinkGospel. Com." Web. Jan. 20, 2015.
- 富山 太佳夫 (Tomiyama, Takao) 『おサルの系譜学 歴史と人種』. みすず書房 2009. Print.
- Thompson, F.M.L. *The Rise of Respectable Society: A Social History of Victorian Britain, 1830-1900*. Cambridge, Mass: Harvard UP, 1988. Print.
- White, James F. *The Cambridge Movement: The Ecclesiologists and the Gothic Revival*. Eugene, Oregon: Wipf and Stock, 1962. Print.
- "William Gibbs of Tyntesfield—Guano King." *Exeter Memories*. Web. Oct. 25, 2014.
- Wolffe, J. "'Praise to the Holiest in the Height': Hymns and Church Music." *Religion in Victorian Britain*. Ed. John Wolffe. Manchester: Manchester UP, 1997. 59-100. Print.
- 安井 稔 (Yasui, Minoru) 「TOEIC の賢い利用法」. 『Web 英語青年』. 2012 年 4 月号. Web.

### 1840年代イギリスの宗教地図

